

精神論としての『法聚論註』及其の改訂版

佐々木 現 順

標題に精神論としてのと傍註したがこれは精神論といふ呼稱によつて所謂心理論に對する區別に於て言つて見たものである。従來、佛教心理學といふ概念を以て當註釋書を呼び習はしてゐたが内容に於て心理心性に關するのみでなく寧ろ心性に立場をおく佛教哲學といふに相應し。

心理論と言へば、心的事態を現象的に取扱ふ操作を想起せしむる。心性を對象として客觀的に把へる態度が支配的のやうに思はれる。しかし佛教の心理分析は全く方向を異にする。心的事態のどの一つを取つてみてもそれは現象するもの自體によりも寧ろそれは主體的本質に屬する。主體の本質とは何であるか。言ふまでもなく「無我」に外ならない。現在、原始佛教心理論の形態がそのまゝシャム・ビルマ・セイロンの南方諸國に傳承せられてゐると言はれる。しかし若しその心理論が心的事態の

分析的操作のみであるならばそれは傳承と言つても單なる自動的メカニズムに過ぎない。もしさうだとすれば恐らくそのメカニズムは佛教内の、ではなく佛教外的因子（社會的經濟的）によつて釘付にされてゐるのかも知れない。本質的には佛教の心理論はそれと根本的に方向を異にするから。

故に元來、佛教の心理論とはさういふ拘束せられたものではない。即ちそれは何時何處なる場合に於ける可能な心的事態に適應するやうに常に開かれてあるべきものである。可能な心的事態とは何であるか。それは何時の時代、如何なる場所に於ても、たとへ様相を變へることがあつても、無我を目途してある「精神」の事態である。而して適應可能な實にその根據をば無我的「精神」に持つ。でないなら單なる現象的心性分析に拘束せられそこには實踐の原理が否定せられることになるであらう

から。これが標題に精神論としてと特記して心理論といふ通常の呼稱と區別した理由の一つである。

このことは又、單に概念をおき代へてみただけではない。阿毘達磨哲學の根本的性格からしても重要である。

何んとなれば阿毘達磨哲學は有の哲學ではある。(拙著に於ける有の形而上學)だがしかし既に原始佛教時代に外道の實在論に對して無我論が提唱せられたのであるから有の哲學

體系と雖ども實在論の否定を経験して來た筈である。だからその學は批判的でなければならなかつたであらう。批判的に有の哲學を守るためにその體系を嚴密化してや

つた。かくしてそれは批判的有の哲學となつた。それ故に批判的有の立場と原始佛教の無我の立場とが阿毘達磨の體系中に一つに結付いてゐる。そこに阿毘達磨哲學の持つ新しさが見られる。これが哲學體系の根本性格である。

さうだとすると法聚論註の哲學的ドキュメントとしての意味も亦、自ら明白となるであらう。即ちかゝる兩面の結付きが主體的に精神論の側からして實證せられてゆくところにある。

この意味に於て法聚論註即ち *atthasālinī* なる論書は佛教思想史上、最も重要な著作の一つである。

次に其の改訂版を紹介し傍々以て内容の構格に一瞥を與へることにした。

改訂以前の法聚論註の出版について前言する。舊版は一八九七年 Edward Müller 氏により P. T. S 版としてロンドンより出版せられたものである。該版は廣く現在、最も手近に見ることが出来るものとして從來學界に依用せられて來た。ミューラーはシンバリスのマヌスクリプトとして一八八七年 *Salie* に於けるものと一八八七年 Colambo に於て入手したる二種の原本に更に加へて *mandalay collection* のビルマ版に Trenchner 氏の筆寫 (コマンハーゲン大學圖書館所藏シンハリス原本からのロマナイズ) と以上四種の異本を對校し、何れにも不明な箇所は自らの理解を以て訂正校合してゐる。そして彼は以上四種の校合に依つて此の註釋を完成するに充分であらうと述べてゐる。ところが實際讀むにあたつて所謂シャム皇室版として出版された論藏中の該書に比すべくもなく殊に分節の科段に至りては如何にしてかゝる分節を作したるかその論據も甚だ不明であり前後の脈絡の上にて殆ど解讀し難き箇所が極めて多い。それ故に少しく注意するならばシャム皇室版の方を適宜とみて研究せられる傾向は當然ありうる。その P. T. S 版の異常な出入と脈

絡の不備等を各一抽出出来ない程であるがその版を原本としてこゝに英譯が出版せられた。

その英譯は一九二〇年に第一卷、一九二一年に第二卷として前後二卷に依り Maunga Tin 氏によつてなされた。P. T. S. の Translation Series No. 8, 9 におさめられた。The "Expositor" 2 vols がそれである。英譯の原本たる P. T. S. 版の *Athasani* にして以上述べたる如きものであればその英譯の内容についての疑點は當然起るであらう。たゞそこに見るべき助力となるのは英譯者 Trenchner 氏は英譯の中で巴利聖典を trace する事にかんがりの努力を拂つてゐる點である。これも併しながら嚴密に調査すれば完璧でなく此の外に典據の多いことと言ふまでもなく更に既に引用せられた典籍にも間違のあることを知ることが出来るであらう。

P. T. S. 版及英譯に就て一瞥を與へておいたが多くの不足の點は認めねばならないが無價値だと言ふのではない。序文に於ける論作と出所への努力は斯界を益して來たことも確かである。たゞ改訂版として出された同書を斯界に迎へて比較的その校訂の綿密性を指適したに過ぎない。

P. T. S. 版、英譯及びシヤム皇室版にしても何れも一

端の長所を残し乍ら一特に前二種の出版書に於て一不備な點が多く該方面の研究に充全なる資料とはなりえなかつた。

ところで同じ重要な書が既に一九四二年 Poona に於て Bhandarkar aridental Series No. 3 として出版せられてゐたが幾多の外的障害の爲、未だに讀む機會に恵まれなかつた。一九五〇年の十二月はしなくも印度同研究所より我國に齎らされた。こゝに平素よりシヤム皇室版を主として依用し P. T. S. 版をその助成として來た斯界にとつての欣事であることを惟ふに至つた。同研究は P. V. Bapat 及 R. D. Vadekar 兩氏によつてデブナガリーに依つて一九三三年—一九四二年約八年四ヶ月を費して綿密に校訂出版せられてゐる。

因にベンガルカル東方研究所について一言。此の研究所は衆知の如く一九一七年印度學者 R. G. Bhandarkar の勞作を記念し印度學研究の促進の爲に初めてボンベイのポーナに設立せられた。一九一八年十月ボンベイ政府の下で初めて活動を開始。Dr. R. N. Dandekar (一九四八年現在) を所長としてゐる。創設直後一九一九年に第一回の東方會議を開催し有名なマハーブラタの批判的出版をもはじめてゐる。一九二五年研究所出版所が完成せ

られ一九二七年には學位獲得のため研究部門が併置せられるに至つた。行政上の紹介は別として研究所内に現在部門が七學部に分かれてゐる。一、マハブーラタ部 二、原典部 三、イラン・セミテイク部 四、出版部 五、雜誌部 六、圖書部 七、大學院部。その中、出版部が *Bombay Sanskrit and Prakrit Series* と共に他方、我々の述べつゝの *Bhandarkar aridental Series* とを管理してゐる。後者のシリーズ第一として既に一九三九年に、*Pāṇinīyāśāstra* 第二輯に一九四〇年 *Dharmasāstra* を法華論註と同形式を以てデブナガラライズして出版してゐる。次に校訂者について。その一人 *Bapat* は既に *Vimuttimāga and Visuddhimagga* (北京・丹殊爾第九十函) を出し我國に於ても學者の依用に問題を提供したことがあり、彼は此の外、未出版ではあるが *Suttaṅgapaṭṭa* を校訂し終つてゐると傳ふ。他の一人 *Vadekar* は *Prīṭhā* と *Mūlīndapaṭṭha* の二書を同じシリーズより出してゐる。本シリーズは將來、*Visuddhimagga*; *A study. Chinese version of the Athakavagga. Chinese Version of the Samantapādikā. A Tibetan Version of the Third Chapter of the Vimuttimāga. A Practical Pāli Dictionary* 等の校訂本及び諸研究を續刊す

ると言はれてゐる。ともかくシリーズ第三輯として出されし本註釋より推して續刊の部門も攝取しうる限りの異本と對校研究を重ねられてゐるものと期待して良い。

當註釋の改訂版 (*B.O.S* 版と略稱する) に用ひられてゐる異本。五種ある。一、一九一六年のセイロン版 二、一九三四年ベルマ版 三、一九二〇年シャム版 四、一八九七年 *P.T.S* 版 五、一七九七年セイロン版 (寫本)。これらの諸本の中、三と四の二種以外の出版本は實際如何なる手續をとりて出版せられたるものか我々に充分知り難いが既刊本である。とまれ *P.T.S* 版に参照せられた諸異本に加へ更に四種を追加しその上、各章分節の段別に至つては校訂者自らの論書理解とその判斷を以て適切になされ *P.T.S* 版以上の典據を與へてゐる點は、敬服の外はない。殊に出版に至る約八ヶ年以上の間の研究の成果としての詳細な論述をその序言に於て見ることが出来る。索引を入れて總頁四四二頁となつてゐるが、その序言の中注意すべき點は從來佛音の作とせられてゐたものをその弟子の作として述べその論證を内容構成の批判的研究に依つて與へんとする試みを見ることである。本書の著者に就ては既に先きに *Mrs. Rhys Davids* が *A manual of Buddhism for advanced Students, 1932.*

p. 30 ではなく同様なことを述べてはゐる。しかしそれは唯一つの暗示を興へてゐるに過ぎない。此れに對して本校訂者は序言に於て佛音の清淨道論と比較照合しその思惟形式を探索、かなり堅實な資料を提出してゐる。序言はたゞ著者の問題に限られない。そこに内容自體に對する校訂者の理解が論述せられてゐる。殊に後者は前にも劣らず注目に價しよう。何故なれば内容の理解は章節に對する分段の仕方を理由づける。そればかりでない。佛教精神論に對する態度をも規定する。それこそ本書に於て他出版本より全く異なる分段の見られる根據でもあるであらうから。

その内容の素描(括弧内はB・O・S版章段)六章に分かれる。一、因縁論 二、論母註 三、心生起品註 四、色品註 五、總說品註 六、義釋品註。一、因縁品に於て阿毘達磨の語義と佛說たることを示してゐる。佛說を異門(*pariyaya*)と不異門(*nipariyaya*)とに大別してゐるのであるがそれについては後述。こゝで主として佛說を三藏(一・四六―六〇)、四部(一・六一―六五)、八支(一・六六―八萬四千の法門(一・六七)の四種の立場から論述する。第二章で十五の分節に分けその各々が部分的解釋と全體の解釋に分けられる。本章の困難な箇處は二・一一―一

三及二五・四一に見られるがそれに對し校訂者は極めて注意深く讀んでゐる。そして結局論母の詳論は此の章でなく次章に於て展開されるとする。第三章は最も重要な部分で該書の五分の三を占めてゐる。しかし論母註の最初の *Tika* の全部を論述し盡してゐるのでなく善法(三・一一五三九) 不善法(三・五四〇―五六九) 無記法の一部たる異熟無記(三・五一―六五八) と唯作無記(三・六五九―六六六)との三である。特に異熟無記は複雑な部分であつて佛音自身三・五八八―六四五に *Vipaka-uddharakatha* として長文の傍論に入れてゐる。こゝに異論をあげそれに對する決定の態度を興へる論議は常に合理的立場に立たうとする佛音の方法を明白に示してゐる箇處として注目すべき節である。第四章は色の説明であつて清淨道論と一致する箇所が多い。しかしそれと別に特出せられて良いのは心事(*hadayavathu*)についてである。そしてそれは究極の所、發趣論(一・四)にある如く內的思惟の基體を指すとしてゐるが此の問題について他に *Shwe Zan Aung; Compendium of Philosophy* の註に詳述せられてゐるのを見る。その他、水界が、觸處の中に攝せられない理由について述べてゐる。原理的説明でないので充分に知り難いが此れは佛教哲學に對する一

つの大きな問題となる。第五章は論母で總説であつて、たとへ品詞上の註釋が與へられてゐても五・一―二以下を第五章に分節してゐるのは正當である。第六章は各章の中、最も短い。法聚論の同箇處は舍利弗に歸せられるが此れに對して佛音は大註によつて反駁し佛陀に歸屬せしめようとする(六・二)。特に違逆心、道德的力、道、果、界の説明を既に前章の術語に加へて説明する。然し佛音が法聚論一三七〇節の涅槃の概念について言及してゐないことや九八三節の無爲界を説明してゐないことは、たとへ簡單な説明(四・二)を見るにしても奇異の感を懷かしめる。

註釋書の題目。註釋書の本典たる法聚論は *dhamma-saṅgani* とあるが (*Vibh. Comm. p. 287. 301*) 此れは、*Dhammasaṅgaha* と呼ばれしむる (*Vibh. Comm. pp. 290, 432*)。だから法聚論註は *Aṭṭhasālini* と呼ばれ、*Dhammasaṅgaha-Aṭṭhasālini* とよばれ法聚論の各章の註釋の終りの題目はそれである。 *Aṭṭhasālini-Dhammasaṅgaha-Aṭṭakathā* は現存の律註 (*Samantapāsādikā Vol. i. pp. 150-151*) に見られるのみでなく漢譯(大正二四・七〇一⁶²)にもあるが此の問題に對して校訂者は挿入であらうと推測する。その理由。律註は法聚論註(三・

一四三・一四四)に關説せられてゐるしその他、ニカーヤの或る註釋の中で關説されてゐるからである。

巴利七論中の分別論註との關係。法聚論註を先きに書き分別論註はその後であることが *hetūna* (above) という表現を後者に屢々用ひてあることから知られるが、さういふ全體としてのみならず各章句全く一致してゐる處が多い。單にその前後の問題のみでなく法聚論註の中で緣起分別(五・一一九)と菩提分分別(三・七〇)なる名目を出しそこでの詳細な説明を將來に約束してゐるのを知る。法聚論を書く時に既に分別論註を書く企のあつたことを知りうるであらう。ともかく兩論の關係は極めて密接である。

法聚論註に用ひられてゐる方法は如何なるものであるか。その適出。一、他のニカーヤ註に見られる如く長い序文に續き阿毘達磨の内容と正統派の見解を與へ非正統派への批判を経て自らの結論を述べる。二、相・味・起・足處といふ四種の實在規定の範疇の適用。三、或る喩説を一再ならず用ひる場合の如きはその喩の本質的重要性よりも自己に *favorite* な喩を採用してゐる點も見逃せない。四、意見の權威をニカーヤはもとより古聖・大註、ニカーヤ註に求め五、それらをセイロンに於ける自

らの生活經驗に取材して此れを具體的に述べる。六、しかし諸註の見解にして不承認と考へる點については合理的な部面を採用するが註釋以外の結論については選擇的に採り上げてゐるのを見る。合理的即ち理長爲宗の態度と言つても自らそこに一定の類別が與へられる。三つの類別にまとめる。(i)經所説を相對的異門の立場とし阿毘達磨を絶對的不異門の立場とする。(ii)佛説の異時の分別を與へる。此れにも三種あり。密意趣、所化の能力、説法の恩惠の多樣と言つたものである。(iii)經律の含蓄せられた意味の理解。此の三種の類別的態度は他の諸部派と比較して興味ある一つの特色である。有部では經を密意、論を法相となし經部、大衆部乃至室利羅多(俱舍論二十二卷・稱友註參照)等は經を異門、論を自相門とする。

従つて佛音の類別たる異門と不異門との根本的相違は必ずしも内相の意味と外相の意味といつたものでも、又理解の態度の轉位といふのでも盡きない。何らかの意味で相對的である場合が異門であり、如何なる場合に於ても妥當する一般性絶對性を有する場合が不異門である。此の點に就て校訂者の論議はないが阿毘達磨理解の根本的精神を規定する概念として更に將來の課題たることを指摘するにとどめる。七、以上の六種の類別の標準が凡て

を盡し得ない場合、獨自の信念による判斷が加へられる場合もある(四・一一八五・六三・七七)。

外的條況との關係。佛音のセイロン滞在時代(約五世紀前半 Harvard Oriental Series, pt. I, p. 48) の宗教的社會的狀態が關説せられてゐる。殊に宗教の問題については佛音は必ずしも排他的であつたのではなく自ら諸神を供養、境内の清掃等の行事を實行してゐたらしい。それは恐らく北方セイロンに植民した Tamilian のヒンヅー寺院の作法を見たであらうと想像せられる。此の點については Sastri, H. K, South-Indian Images of Gods and Goddesses, madras 1916 及び Ferguson, J; Tree and Serpent worship, London 1868 等があるが、紀元五世紀頃のセイロンの宗教状態について具體的記述はなくその分野に於ても一つの資料を與へうることゝ信ずる。改訂者の所論の中、注目すべきものは著者に就ての意見である。その見解について。該註釋書が佛音の著作であり(Mahāvārīsa, Sāsana varīsa, Saddhammasaṅgaha) セイロン出發前の勞作であるとせられるのに對し此れを佛音の弟子作にしてセイロンに於けるものとしてゐる。以下その見解の要約。Saddhammasaṅgaha U. P. T. S. 1890, p. 53) に依ればセイロンに渡る以前にシンハリ

ズからマガダ語く Mahāpaccariyatthakathā を譯してその次にこの Athhasālini を書いたと言ふ。しかしさうではない。D. Kasambhi も指摘してゐる様に (Vism Devanāgarī edition pp. xiv-xv) 此の註釋書はその序文 (一・一・一八) で清淨道論に關説してゐるのを筆頭に數多くの trace を清淨道論に求める。それ許りでなく清淨道論の中でオリジナルに考へてゐた業處、行、神通等 (一・一・一八) をこの註釋で除くことを企てゝゐる。然るに先きに一瞥したところであるが Samantapāsādikā に本書の名目が出てゐる。がそれは挿入であるとする。又、校訂者は Athhasālini の次に Sammohavindani を作つたものであり Samantapāsādikā はニカーヤの諸註釋及本註釋書以前に存在してはゐたが、その後、再三手を入れ現存の形に整へられたと言ふ。その現存のものより小さな原典があることは Sanghabhadra による同書の漢譯 (488-89 A. D 作) と比較すれば證明しえられる。漢譯の六丁の中、四丁が P. T. S 版の前二卷に相當し残りの二丁程が三卷 (iii, iv, v, P. T. S) 及未出版 (おそらく一巻以上にならう) の部に相當してゐる。P. T. S 版の最後の部分に加筆のところを見るがその相當漢譯部分を缺く。例へば、P. T. S 版 (iii:626) に pupphamānāma... maṅḍanathāya pana, sivaṅgādi puṅḍanat-

thāya vā, kassaci dātun na vadati (シブリンガの供養又は莊嚴の爲に花を與ふべきでない) とある箇處に對する相當漢譯部分がない。このわづかな點からしても Samantapāsādikā が現存の形になるまで長く手を入れられて來たことを知る。だからたとへその中に本註釋書の名目を記しても必ずしも時代の前後を明白に區別せしむるものではない。かくして該註釋がセイロンに於て作られたことを述べる。では著者を佛音の弟子と推定する點はどうであるか。該註釋書と佛音著清淨道論との密接な近似性は一見して見出しうるがその相違も決して少なくない。而もその相違は單なる解釋といふのでなく佛教哲學に對する哲學的理解の根本に相違のあることを示す箇處がある。その哲學的箇處として二十五種程の概念と節を摘出し同じ著者による他の註釋と法聚論註との興味ある比較を興へてゐる。その中、名目と對照のみを略記する。

Dhs Conn

- (1) Dvvidham-jhānam (3.337) Vism. or other Athhakathās
4.119 Dcm. i. 213, Mcm. i.
124, Scm. ii. 175, Acn. ii. 100.

Vi. com. i. 142, 147, Scm. iii.
111.

- (2) Vedanā 14.125. 比較なし

- (3) Sañhā (3.188-9) 14.130

(4)	Cetana (3.190-2)	14.135
(5)	Sukha (3.208-210)	4.100
(6)	Cittasekaggatā(3.211-2)	14.139
(7)	Saddhā (3.213-6)	14.140
(8)	Viriya (3.218-9)	14.137, 142, 143.
(10)	pañña (3.225-228)	
(11)	sati (3.221-3)	
(12)	Hiri, ottappa (3.234-240, 247)	MCm. ii. 313, SCm. iii. 117. ACm. ii. 96
(13)	Nāman, cattubhidham (5.112-113)	7.54
(14)	Neva davāya, na Maḍāya etc (5.136-140)	1.89-94
(16)	maṇḍana を除説	除は antepvrika-vesiyādayo
(17)	vibhāsana を除説	natanaockādayo の説明
(18)	Navam ca vedanam (5.137)	1.93.
(19)	anavajjatā ca phāsu-vihāro ca (5.138-9)	MCm. i. 77, Scm. ii. 106, Acn. ii. 185)
(21)	visakkaṇṭaka-vāṇija (3.435-36)	Vis (10.20-24)
(22)	Kammābhāna (3.315, 339, 287)	6.56, MCm i. 195, i. ii. 236, 358, SCm. i. 104, etc
(23)	Mandapañāssa cattāri anulomani (3.507)	22.17
(24)	tadāngappahānam (5.22)	22.112. SCm. ii. 253
(25)	3.503, 504, 506 の見解	21.111-116, Paramattha-mānūsā, ii. 856 (Burmese ed)

以上列擧した二十五種の中で例へば *kammabhāna* (22) や *anulomacitta* (23) についてその理解に極端な相違のあること或は又、ニカーヤ註釋の中で清淨道論に關説するやうな場所ではそこに自分自身の解釋を興へてゐると思はれるところのあること並に清淨道論の所説を法聚論註の中へ *apara naya* としづるものも見られることなど。佛音の如き大註釋家が自ら解釋をば別人所説の如く *apara naya* としづる仕方であるなら自己の解釋を第一にするに相違ない。では全く無關係な同名異人であるかと言へばやうではなす。一、一、一六に *mahāvihāravāsīs* の傳説について述べることより推して又、思索の方法といふ點より判斷して佛音と同じ傳統に屬してゐたであらうと考へられる。そして佛音といふ名を望んで (一・一八) それに類同して *bhikkhunā Buddhaghosena* としづてゐる。そしてそれが *Thera* 或は *acariya* とせられてゐなうことは注意するに足る。

以上で該書の内容を校訂者に從つて素描した。南傳佛敎の創設者とせられた佛音の確實な傳記について幾多の學匠の努力があるが決定的でない。又、その哲學思想について深く研究する別途の仕方は現在、餘り多くを見な

い。然るにその仕方を以て佛音の位置を明らかならしめんとした校訂者の方法論は歴史的研究の上に新しい試みを提供する。單に歴史的手續の上のみではない。將來期待さるべき體系的哲學思想研究の上に何れも増して尊い礎石を置いた。

次に以上を總括する。法聚論註はP・T・S版とB・O・S版との二種を持つことゝなつた。然るに前者は過去の役割を果しながら凡ゆる點でB・O・S版に取つて代られるに至つた。B・O・S版に對する supplement としての意味を二様に殘して。即ち(1)P・T・S版はB・O・S版依用のマヌスクリプトより古いものに據つてゐる。それ故に必ずしも改訂を要しない諸點を持つ。却つて意味上、P・T・S版の正當な場合も決して少くない。(2)P・T・S版の脚註に記した諸種の trace の中、法聚論を初め註釋及ニカーヤ、更に異本の提出等は依然として不可缺の資料たるを失はない。此の點で E. Müller の業績を認めながらもはや第一資料としての價値を全く其の改訂版B・O・Sに讓つた。

附記

此の紹介は既に五一年九月に原稿として手渡してあつたものである。然るにその後五一年十二月にレポートの中に一言

したところの Bhandarkar Oriental Research Institute より一九五〇—五一年間のレポートを見る事が出来た。故にそのレポートによつて該研究所に關する二、三の記録を附加しておくことが、必要であるやうに思ふ。法聚論註はその最初の最近の業績でもあるから。

報告は一九五〇四月一日—五一年三月三十一日までのことに限られる。現在、會長としては、ケンヌイ總督 maharaj Singh があたり、その下に Patwardhan を初めとする七名の學者を副會長としてゐる。法聚論註を出版した關兌する所があつた出版部の仕事としては、此の期間に Sarvadarśana-saṅgraha と Kāvyaṅkṣa と Śotrāmanuscripts (vol. XIII, pt. 3) を出版してゐる。次にマナーマラーマ研究部は Belvalkar 校訂の Śaṅhīparvan と Vaidya 校訂の Kāṅgāparvan の bacīcūle I を出し、その他、此の部で現在出版に近づくものとして Droṅoparvan, Karṅgāparvan, Śrīparvan, Asvamedhīkāparvan, Śaṅhīparvan 等の仕事に着々と遂げられてゐる。又一九一八以後十二卷にわたつて出版されてゐた Descriptive Catalogue of the Government manuscripts に就てその全出版を政府援助の下に進めつつあるやうである。此の研究所は私の報告中にも言つた様な部門に於ても他の例へば poona 大學との協同研究を進め大學院に當る設備を設け大學の教授を以て指導にあてサンスクリットプラクリット、古代印度文化の諸研究に關する權威者の依頼をなす等、外部との研究交渉を密にしてゐる。法聚論註も、それ等、諸事情の下に出されてゐると思はれる。

本研究所の Dr. Sir. R. G. Bhandarka の二十五年祭が丁度一九五〇年九月十六日にあり、同年十月十七日に英國よりオックスフォード大學梵語學教授 T. Burton Boden 氏によつて Some Aspects of the Formation of nouns in Sanskrit なる研究發表を持つた様であるがプリントされた記事は見當らない。しかし記念祭の時の發表 Some Ideason

Historical Interpretation (C. S. Shrinivasa) charit Annals (p. 56-69) の Vol. XXXI に印刷されてゐる。
 近來、印度の古典研究の狀況が次ぎ／＼と知られて來て戰後の盛んな意欲と勞作に接しうるのは欣快に堪へない。その中、ともかくも法聚論註に關係ある本研究所の其の後の一端を附記しておく。

大谷大學研究年報

第四輯 A 5三〇六頁 頒價 二五〇圓

第五輯豫告

感情の本性と無の問題

世良 壽男

ゲーテの自然研究に於けるイデー
 本願に於ける諸問題

大庭米治郎
 日野 環

六條の御息所

多屋 頼俊

竺道生撰「法華經疏」の研究

横超 慧日

草堂詩餘の版本の研究

中田 勇次郎

平安時代に於ける宗教的自覺過程

藤島 達朗

西藏譯「解深密經疏」に就いて

野澤 靜證

教育社會に於ける學校の地位

前田 博